

隠喩としての建築

柄谷行人

講談社

隠喩としての建築

一九八三年三月二日 第一刷発行
一九八三年四月二〇日 第二刷発行

著者——柄谷行人
からたに こうじん

© Karatani Kojin 1983, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二（大代表）
振替東京外—五〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

I

隠喩としての建築 7

形式化の諸問題 93

鏡と写真装置 127

II

検閲と近代・日本・文学 141

核時代の不条理 164

小島信夫論 169

内輪の会 179

言語という謎 182

伝達ゲームとしての思想 189

建築への意志 204

*新*か*ら*だ*読*本*

『隠喩としての病い』にふれて

233

Ⅲ

アメリカから 241

八〇年代危機の本質 245

アメリカの思想状況 249

中上健次への手紙 255

サイバネティクスと文学 261

凡庸なるもの 265

リズム・メロディ・コンセプト 269

ある催眠術師 274

外国文学と私 278

「現代思想」と私 282

六〇年代と私 284

受賞の頃 288

あとがき 292

初出誌紙一覧 293

隠喩としての建築

一九八一、一〜一九八二、八

I

隠喩としての建築

自分の得た結果をそのような一つの全体に融合しようとする多くの、未成功に終わった試みのあとで、私は自分にそのようなことが成就できるわけがないこと、私の書きうる最上のものはたんなる哲学的考察にとどまるであろうこと、私の思想は、それを自然のなりゆきに逆って、むりやり一つの方向に向けようとしたとたんに、不具になってしまふであろうこと、に気がついた。そして、このことは、もちろん、ここで行われる探究そのものの性質にも関係していたのである。——すなわち、この探究は、思想の広汎な領域を縦横無尽に、あらゆる方向へ向かつて遍歴することを、われわれに要求する。

(ウィトゲンシュタイン「哲学探究」)

第一章 建築への意志

1

哲学者を定義しようとしたとき、プラトンやアリストテレスが建築家を隠喩として用いたことは、建築がギリシャ語において意味したことから考えてみれば、たんなる偶然ではない。古代ギリシャ語において、建築 *architectonicē* は、*architectonicē technē* の省略であつて、*architectōn* の *technē* (テクネー) を意味してゐる。そして、*architectōn* は、始原、原理、首位を意味する

arche (アルケー) と、職人を意味する technon との合成語である。ギリシヤ人において、建築は、たんなる職人的な技術ではなく、原理的知識をもち、職人たちの上に立ち、諸技術をすべ、制作を企画し指導しうる者の技術として理解されていた。この場合、ハイデッガーが強調するように、テクネーという語は、狭義の技術だけでなく、制作 (ポイエーシス) 一般を意味していたのである。しかし、こうした語源学が、何かを明らかにするよりは、むしろいつも何かを隠蔽してしまうことに注意すべきだろう。ここで重要なのは、プラトンやアリストテレスが哲学者を建築家になぞらえ、哲学を知の建築とみなしたこと、いいかえれば知を建築的なものたらしめようとした一つの決断にほかならないのである。

プラトンはいつている。《創作 (ポイエーシス) というのは広い意味をもった言葉です。いうまでもなく、いかなるものであれ、非存在から存在へ移行する場合、その移行の原因はすべて、制作です。したがってまた、あらゆる技術 (テクネー) に属する制作は創作 (ポイエーシス) であり、それに従事する工作者は創作者であるわけです》(『饗宴』)。ここには、あらゆる生成を「制作」としてみる建築家の視点がある。たしかにアリストテレスは、人間の制作と自然による形成を区別したが、そのこと自体プラトンの問題意識のなかでなされている。この視点は、プラトンを、プレソクラティックスから区別するだけでなく、一般にギリシヤの思想的主流から区別するものであり、また西洋の知に特徴的な何かを刻印するものだといつてよい。われわれはそれを「建築への意志」とよぶことにしよう。幾何学も、それが超越論的であるためには、建築的なものでなければならなかった。ユークリッドは幾何学を五つの公理にもとづく厳密にして堅固な建築たらしめようとした。幾何学が諸科学の基礎であり、幾何学的な記述が厳密なものと思われたのは、それがもはや

自然に負うことのない建築性をもつと思われたからである。

2

F・M・コーンフォードは、ギリシャの思想家をほぼ二つに分けている。一つは、進化論的なもので、世界は生命のように生まれ成長するという見方であり、もう一つは、創造説クリエーション的なもので、世界は芸術作品のようにデザインされているという見方である（『書かれざる哲学』）。この二つのタイプは、いいかえれば、「制作」として世界をみるか、「生成」として世界をみるかに分けられる。これらは、現代の批評の言葉でいえば、「作品」——超越論的な意味の外化・再現としてある——と、「オクスト」——超越論的な意味あるいは構造をたえず超出しあたかも自ら意味を産出するかのように見えるものとしてある——に対応するといつていいかもしれない。しかし、これらは単純に二つのタイプとして分離されるものではない。ちょうどテキスト理論が、構造主義が与えた可能性のなかではじめてあらわれるように、これらは相互的な緊張関係にある。

古代ギリシャの一般的な素地においては、プラトンやアリストテレスは、生成を制作としてみることに、また哲学者を政治的な意味での建築家・プランナー・デザイナーとしてみることに、むしろ少数派としてあったというべきである。彼らの「建築への意志」がその素地のなかに融解してしまわないためには——実際そうだったのだが——、ある非合理的な強力な思想、つまり God as the Great Architect という思想が不可欠だっただろう。私はここで思想的回顧をするつもりではないから、次のことだけを指摘しておきたい。しばしば合理的な思考の源泉とみなさ

れるギリシャの思想家における「建築への意志」が、ヘブライズムに劣らず、非合理的な選択にほかならなかったということである。ニーチェが、それを、生成の多様性・偶然性を肯定することのできない弱者のデカダンス、あるいは合理主義への非合理的な逃避とみなしたように。

3

隠喩としての建築とは、混沌とした過剰な、生成^レに対して、もはや一切、自然^レに負うことのない秩序や構造を確立することにほかならない。それは実際の建築や幾何学とはすでに関係がない。幾何学が規範的だとすれば、それが建築的だからであり、建築的たらんとするかぎりにおいてである。したがって、幾何学の内部では、それをより堅固な建築たらしめようとする動きがやむことはなかった。とりわけユークリッドの第五公理（平行線に関する）をめぐって。二千年以上ほぼ揺ぎなく存続したユークリッドの「建築」が崩壊せざるをえなかったのは、その建築の基礎が点や線といった多義的な自然言語にもとづいていたからである。十九世紀後半からの数学者の努力は、自然言語を排除することによって、完全な公理体系を建築することに向けられたが、それはゲーデルの「不完全の定理」によってとどめをさされた。こうして、数学は、それ自身では完全な建築ではありえないこと、それは諸科学から独立して諸科学に超越的な基礎を与えるものではなく、その妥当性は、解釈に依存するということが明らかとなった。数学が基礎をもたないということと、数学がそれ自体発展してきたことは、なんら矛盾しない。数学を発展させてきたのは、建築的な厳密さではなく、点や線というような自然言語あるいは知覚にもとづくあいまいさだったのである。

たとえば、ガリレイによる解析幾何学、ニュートンによる微積分の案出と導入は、あたかも物理学を数学的に基礎づけるかのようにみえるが、実は、それらの数学は厳密な基礎をもっているのではなく、均質・等方向で、分割可能な空間・時間という「仮説」にもとづいている。物理学および物理学的であることによってその科学性を保証されているかのようにみなされている諸学問は、その基礎を数学にもっているのではなく、右のような均衡論的「仮説」にもっている。その典型的なものは新古典派経済学であって、数学的处理を可能にしているのが貨幣による歴史的な市場経済であるにもかかわらず、貨幣形式に関する疑問をすこしもたないものである——いうまでもなく、マルクスの『資本論——経済学批判』がそれをはじめて疑ったのだが。

数学者が——つねにきわめて少数であるが——数学の「基礎」に関して絶望的であるかすくなくとも謙虚であるにもかかわらず、数学者が抱いている数学的基礎づけに対するオブティミズムは、現代においては、代数的な「構造」にもとづく構造主義において典型的に示されている。それについてのはのちにのべるが、逆説的なことは、数学者が、経験あるいは知覚に背を向けて、それらに何一つ負うていないかのようにみえる数学的な「建築」にもとづくことを科学的な知の保証とみなすにもかかわらず、諸科学の、そして数学そのものの発展を可能にできたのは、そのような厳密な建築性であるどころか、あるあいまいさにほかならなかった。それはたとえば「力」という概念をとりあげるだけで充分明らかである。物理学は「力」という自然言語がもつ意味合いを、限定するとはいえ、まさにそのような隠喩にもとづいている。厳密な言語——人工言語・理想言語をめざす哲学が、それ自体いつも自然言語の多義性（あいまいさ）によって発展するように。

13 隠喩としての建築

西洋的な知において重要なことは、あたかも基礎があるかのようにみえる実際のあるいは知の諸建築ではなくて、たえず危機において更新される「建築への意志」にほかならない。それは、混沌たる多様な生成に対して、自立的な秩序・構造を見出そうとする非合理的な選択であり、危機において、それが一つの選択にほかならないことが明らかにされる。フッサールが『ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学』においてみた「危機」は、そのようなものであった。へところで、すでにガリレイのもとで、数学的な基底を与えられた理念性の世界が、われわれの日常的な生活世界に、すなわちそれだけがただ一つ現実的な世界であり、現実の知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験されうる世界であるところの生活世界に、すりかえられているということは、きわめて重要なこととして注意されねばならない。

フッサールが知覚あるいは身体における多様な「生成」をみようとしたことは事実であるが、彼の関心は、けっして近代科学の知をそこに de-construct してしまふことにはあつたのではなく、現象学が開示する多様な混沌の世界のなかでの「建築への意志」を再確認することにあつたのである。だからまた、彼は、ガリレイ以来の、合理主義に安住しているがゆえに逆に、非合理主義が支配している一九三〇年代ヨーロッパの「危機」において、それをのりこえるものを「建築への意志」にもとめたのである。彼にとつて、理性は、あるいは精神は、実現された諸建築にあるのではなく、「建築への意志」としてしかないのであつて、したがつてそれはやはり西洋にしか

いという結論に到達する。彼が歴史そのものに「理性」の目的論を見出すとき、そうとは知らずにヘーゲルに回帰しているのだが、あとでのべるように、ヘーゲルにとっても、「精神」とは、一つの「建築への意志」あるいは一つの投企にはかならないのである。

フッサールと同じ時期に「危機」に直面したホワイトヘッドは、諸科学を支えているのは、数学あるいはなんらかの確実な基礎ではなく、世界が God as the Great Architect によって作られているがゆえに窮極的に可知的であり秩序をもつという「信念」だといっている（『科学と近代世界』）。この「信念」は、中世にキリスト教とプラトニズムによって形成されたのであり、それゆえ近代科学は西洋からしか出現しなかったというのである。この「信念」こそ、「建築への意志」なのである。

ところで、ニーチェが基本的に敵対し、また病理学的な症候として解説しようとしたのは、この「建築への意志」——彼はそれを「権力への意志」に対して「真理への意志」とよんだ——であった。彼にとって、ヘーゲルやフッサールとは逆に、そのような選択は、「危機」からの病理学的な逃避にはかならなかった。彼はそれをたとえばソクラテスに見出すが、むしろ重要なのは特定の歴史的事実ではなくて、それが新たな文脈で、反復^レされていることなのだ。西洋的な「知」は、ある危機を回避するために厳密にして堅固な建築をうちたてようとするが、逆にそれが何一つ基礎をもたないという危機を見出すことに終る。だが、この症候的な「反復」を、だれが嘲笑することができるか。

たとえば、ニーチェは「西洋人は仏教を理解するほど成熟していない」という。たしかに、仏教は、本来的に「批判哲学」であって、アイデア・本質あるいは建築への意志そのものを、イデオロギ